

NCNL 図書館だより

No.13 Jun 20 2003

大学図書館に助けられて

教授 加固正子

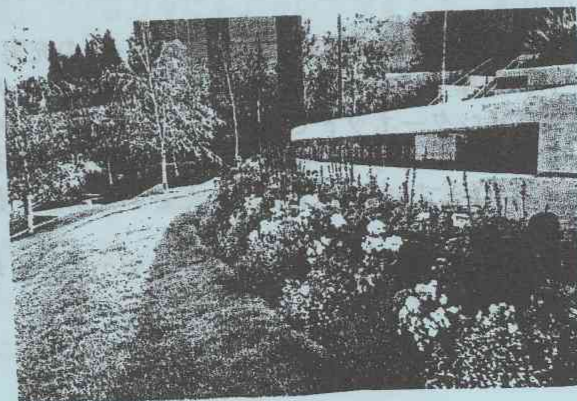
およそ 10 年前、私はシアトルにある私立大学看護学科に約 10 ヶ月間留学した。そこでの留学生活は優雅にというわけには行かず、日々英語による授業と格闘し、英語でコミュニケーションに一喜一憂することに明け暮れた。そんな外国人留学生の強い見方になってくれたのが、大学の図書館であった。図書館にはコンピュータ作業室やメディアセンターが統合されており、館内で借りた本や雑誌を抱えてレポート作成が行うことができた。1 階の入り口近くの中央には案内係がいるので気軽に質問ができ、その階ではあらゆる辞書や参考図書が手に入った。その階は総合案内の役割をもっていた。コピーコーナーにはホッチキスや穴あけパンチが常備されていて好評であった。朝は 7:30 から夜は 23:00 まで開館し、日曜日の午前中以外は土日でも使用可能なため、私はあらゆる助けを求めて図書館に通った。このように、米国の大学図書館は開放的で実用的である。

私が参加したコースの最初のガイダンスでは、担当教授からのグループワークの方法やレポートの書き方などの説明の他、司書からの図書館の使い方や文献検索についての説明があった。全てにおいて個性と自由を尊重する国柄ではあるが、レポートの書式は 3 年次から APA (アメリカ心理学協会) 形式に統一して指導されていた。これはどの大学でも看護系論文一般に共通であるということであった。宿題として、成書と定期刊行物の両方の文献を 1 件ずつ探して、その証拠となる部分のコピーを 1 枚ずつ提出した。いわゆるオリエンテーリングである。「分からないときは、質問する」「自己主張をしなければ、推し量ってはくれない」というのが、米国生活で学んだサバイバル術であった。

コンピュータ (PC) による文献検索の速さ・便利さには当時の日本とは格段の違いがあった。タイトルにチェックマークを付けておくと、その部分だけの文献リストが印刷でき、その図書館が所蔵しているかどうか確認できた。急いで探しているときには欠かせない機能であった。検索用 PC は各階にあり、広い図書館を昇り降りしないで済んだ。テーマ別レポートをまとめる場合には、新しい知識が学会誌などにどんどん掲載されるため、定期刊行物を必ずチェックしなければならなかった。専門性を追求したい場合には、ヘルスサイエンス専門の司書が文献検索の支援もしてくれた。また、学生にメールアドレスと暗証番号を与え、自宅から図書検索が可能になった。これは、検索用 PC が何台あっても足りないために取り入れられていったという。PC ルームのサポート体制も充実していて、PC 操作が分からなくなるとメディアセンターの学生 (アルバイト) に気軽に質問できた。

振り返ってみると、米国の大学図書館は、いかに学生が自己学習するための最良の環境を提供するかに焦点を当てて創りあげられていた。そして、図書館利用者が最新の科学的情報に接することができるよう、文献検索ソフトやインターネットをいち早く取り入れていた。現在では、本学図書館も同様の恩恵に浴しているため、多くの利用者がますます図書館に親しみ、先人の知識と最新の情報を学習に利用していただきたい。

大学図書館外観
(写真)



評者は、予算・時間の制約条件から、いわゆるノウハウ本の類は講読しないこととしている。しかし、本書は日本の地域産業論、中小企業論の「現場主義」研究者である関満博氏が著者であることから、発売と同時に講読した。

本書は、序章を一読するだけで、著者のいわんとするところが理解できよう。まず「現場主義」とは、「自分で実感すること、自分の言葉で表現すること」として、自ら現場に入り、生きた情報を得ることを重視している。さらに現場との関係性について、現場は自分の仮説検証の場、いわば実験材料ではなく、自ら働きかけ、ともに考える場であり、現場を愛し、「一生付き合う」心構えが必要であるとする。そのような現場主義に基づく調査研究が現場を荒らすことなく、現場に役立つことを成しえようとしている。

しかし、現場主義には批判的な考えも多くみられる。例えば、調査者が現場に入る、関することに

よって、得られた結果は客観性が保てない等である。また、研究者は政策策定や実践に関るべきではないと考える人もいる。

評者は、融資業務経験、「調査せざる者、発言権なし」を是とするゼミに所属していた経験等から、「現場主義」者であると自認している。また、評者の「場の共有」、「調査地から得たものはより高い価値をつけて調査地へ還元する」という考え方も「現場主義」に基づくものである。さらに、サルトルの如く、研究者は社会に関する責務があると考え、そのような行動を選択している。ただ、筆者のように「一生付き合う」ことができると自信をもって言えるような現場はなく、これが当面の課題である。

序章以外では、現場調査のノウハウ（荷物は少なく等）や調査結果のまとめ方等が具体例をあげて述べられており、現場調査を志す方に参考となる。

※ISBN 4-480-05940-7

図書館請求番号 361.9-Se24

登録番号 001033148

2002年度図書館利用統計

	2001年度	2002年度	増減
開館日数	267日	272日	+5日
入館者総数	61,371人	65,362人	+3,991人
貸出総冊数	10,233冊	12,574冊	2,341冊
学外利用者総数	1,389人	1,255人	-134人
文献複写依頼数	300件	667件	+367件

大学開学に伴い、図書や雑誌、データベースの充実もはかられ、より広くご利用いただいたようです。

ただし、今年4月の入館者は昨年より大幅減でした。理由の一つに、昨年度途中から図書館まで行かなくても、インターネットで蔵書や医学中央雑誌が検索できるようになったことが大きいかと思えます。

データベースはもちろん便利ですが、図書館で棚を眺めて思いがけず出会う本というのもあります。どうぞ、お気軽に図書館へお越しください。また、わからないことがあったら、遠慮なく図書館職員におたずねください。

7月に文献検索講習会を予定していますので、そちらもどうぞご利用ください（詳しいご案内は別途いたします）。

機械オンチの自分と蔵書検索システム

大学 2年生 坂井 瑠子

昨年の春、私はこの大学に入学し、図書館で初めて借りた本は、習い始めたばかりの形態機能学（解剖学）の本であった。本がどこにどのような分類で配置されているかもわからずに、四苦八苦しながら探した記憶がある。しかしまだこの時点での図書館の活用方法は、「今までの読書の延長線上」であった。

こうした未熟な活用ライフに転機（というほど大げさでもない）が訪れたのは、夏休み明けの9月。とある先生から、初めてOPACという検索シ

ステムを使った蔵書検索の方法を教えてもらったときだった。この検索結果を手にして書架を探し回り、欲しい文献を手に入れたときの喜びは、大きなものだった。

そして現在、この検索システムは、レポートを書く際になくってはならない必須アイテムのひとつとなっている。毎日当たり前のように検索し、ほしい本の情報を得ているが、今でもふと思いつくのは、あの時味わった「読みたい本を効率よく発見することの嬉しさ」である。

本と私

短大 3年生 小林香奈子

本と私の最初の出会いは、思い起こせば幼い頃に母親から読んでもらった絵本だったと思います。幼い私は、絵本の中から様々なことを想像し、夢をふくらまし、ワクワクドキドキしながらページをめくっていたような気がします。物心ついてからは漫画本にはまり、単行本を集めたり、月刊誌をとったり、廃品回収のゴミの中からおもしろそうな本をあさったりと、軽いオタク状態になっていた時期もありました。

そしてここ数年は、本と私の付き合いもかなり大人っぽいものになり、読んだ本からいい影響を

受けることが多くなってきたような気がします。本との出会いは、人との出会いと同じくらい貴重なもので人間的な成長の糧になるものではないかと思います。

最近、実習のための調べものをする毎日が続いています。今の私にとって、本はかけがえのないものであり、心を落ち着かせてくれる精神安定剤のようなものかもしれません。その年齢や時期で本との付き合い方は、変わっていくと思いますが、これからもいい本との出会い、いい付き合いをしていきたいと思います。

本が教えてくれたこと

専攻科 助産学専攻 阿部 紗緒里

ふらっと当学の図書館を歩いていた時に、一冊の本が目にとまりました。江川晴さんの『看護婦物語』です。本を開くと「看護とは何か」という言葉が飛び込んできました。「看護とは何か」それは、実習の時や自分の家族が入院した時など、いくつかの場面でぶつかった問題でした。

本の冒頭部分で、看護師である主人公は患者から「君たちは思い上がっている。機械のようだ。」と皆の前で言われます。主人公は、自分は患者の為に精一杯やっているのにどうしてそんなことを言われなければならないのかと、患者の言葉に対して屈辱感を持ちます。私も、実習中に患者に対して主人公と同じような気持ちを抱いたことがありました。患者に清拭を薦めてもなかなか「うん」といつてくれないのです。私は患者の為に精一杯やっているのになぜという気持ちでい

っぱいでした。

主人公は自分の看護を探し求めて、様々な看護師やその看護師と患者の関係に触れていきます。そして本の最後の部分、「自分の看護とは」に気が付いたとき、冒頭の患者の言葉を再度思い出すのです。そして、患者の言葉の背景には何か理由がある、自分は患者の視点になって患者を想うことができているということに気がつくのです。

私は、主人公とともに自分の看護を振り返ることができました。本を読み終えた後は、胸のもやもやが晴れたようなすっきりとした気持ちでした。

皆さんもぜひ図書館に寄ってみてください。きっと、皆さんにぴったりの本が見つかると思います。

図書館からのお知らせ

その1 卒業生から新聞閲覧台をいただきました

もうみなさんご存じかと思いますが、図書館の前に新聞閲覧台が置かれました。プレートに書いてある通り、昨年度の短期大学第8回卒業生、第6回修了生からの寄贈です。ありがとうございました。これで、図書館が閉まっている時でも新聞を読むことができます。

置いてある新聞は、『新潟日報』『上越タイムズ』『朝日新聞』『DAILY YOMIURI』の当日分です。

『読売新聞』『毎日新聞』『医学界新聞』『協会ニュース』は今まで通り、館内ソファの隣にあります。どうぞご利用ください。



その2 図書館の開館時間が8時30分からになりました（試行）

試行ですが、4月より開館時間が30分繰り上がって、8時30分からになりました。授業の前にもどうぞご利用ください。

ただし、カウンター受付業務（貸出・視聴覚資料閲覧など）は従来通り9時からです。よろしくお願いたします。

その3 読売新聞の記事が検索できるようになりました

今年度より、読売新聞記事データベース「ヨミダス文書館」を契約しました。

1986年9月からの読売新聞、1989年9月からの英字新聞（『DAILY YOMIURI』）の記事と、国会議員・自治体首長から財界・文化・スポーツまでの18分野から精選された、現代のキーパーソンが収録されている「人物データベース」が検索できます。どうぞご利用ください。

図書館ホームページ (<http://www.niigata-cn.ac.jp/library.htm>) のリンク集から入れます（学内のパソコン限定です）。

<検索画面の入り方>リンク集「新聞社・新聞記事検索データベース」から「ヨミダス文書館」をクリック。「読売新聞データベース一覧」画面で、「ヨミダス文書館」のロゴをクリック。↓「法人会員専用」ロゴの横にある「記事検索」「人物検索」等の中から、調べたいものをクリックしてください。

Yomiuri Database ヨミダス文書館

法人会員専用 記事検索 人物検索 英字検索 for English

図書館人事往来 —お世話になりました—

今年春、図書館は大幅に職員が入れ替わりました。そこで、2頁にわたって、新旧職員のごあいさつをお届けいたします。最初は、短大開学以来、司書として勤務され、この春転出された吉原さんです。

司書 吉原貴子さん

新潟県立看護短期大学は私が司書として、また社会人としてスタートした場所です。それまで全く図書館での勤務経験が無かったために初めて知ることが多く、また司書が一人ということで不安もありましたが、館長をはじめ教職員のご指導とご協力があってなんとかサービスをしていくことが出来ました。他大学からの文献複写取り寄せサービスも勤務して初めて知ったことです。それからあつという間の9年でした。当初は職員2人で、午前9時から午後5時まで開館していました。学外者へのサービスはまだ行っていませんでした。それが今では、日中と夜間の職員を合わせると6人体制で、午前8時30分から午後8時30分まで開館し、学外者には貸出も行っています。また、設備面では、平成14年には「大学」が開学したことで、蔵書冊数の大幅な増加や書架・検索用パソコンの増設などがありました。そのほかにも9年の間に少しずつサービスの拡充に努めてきたつもりです。今年度から図書館職員も大幅に入れ替わりましたので新しい風が入り、サービスもさらに良くなることと思います。

看護師が卒業してからも生涯勉強を続けていかなければならない職業だということも大学で初めて知りました。月に100人以上の利用を見ていると、図書館がそれだけ必要とされているという実感も沸いていました。学生への利用者教育が現場で役立っていれば嬉しい限りです。

今は県立図書館で様々な利用者を相手に奮闘しています。大学での9年間を無駄にしないよう頑張っていきたいと思います。9年間本当にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

最後になりましたが、大学図書館がさらに発展されますよう期待しています。

夜間・土曜嘱託員 *みなさん、1998-2002年度まで勤務いただきました。

○太田尊文さん

看護大学の学生さんは、概して勉強熱心で礼儀も正しく良く育っている若者が多く気持ちよく勤めることができました。幸せでした。

看護大並びに図書館の益々のご発展をお祈りしています。ありがとうございました。

○秦野忠男さん

教職を定年退職後5年間お世話になりました。看護、介護関係の書物をいっぱい借りて読ませていただきました。また、教え子や看護師さんになって活躍している方々にもお会いできました。ありがとうございました。

○羽生田崇さん

時が経つのは早いもので、短大生5期の学生さんの入学と同じくして図書館勤務をさせて戴き、戸惑いの日々でしたが良き教職員方々のご支援をえて、楽しく仲良く勤務させていただき本当に有り難うございました。学生の皆さんの熱心な想像を絶する勉学の姿に唯々感動改めて看護のふかさ、広さを再認識した次第です。図書館の窓越しに見た四季の妙高山、南葉の山々や上越地方の母なる川関川の久遠の流れのように、私も皆さんの思い出はいつまでも心に残ることでしょう。

はじめまして 図書館新人職員です

司書 阿部昌子 (あべ・まさこ)

県立図書館から思いがけず高田にやってきました司書の阿部と申します。ふだんカウンターにいないので、オリエンテーションでお会いした新入生には、どこへ行ったのかと思われるかもしれません。カウンターの裏でジミに仕事をしています。

さて、高田の学生となったからには、みなさんに絶対に読んでほしい本があります。

高田在住の作家、杉みき子さんをみなさんはご存じでしょうか？教科書にも多数作品がとりあげられていますので、その作品にふれた方も多はずです。短大の校歌の作詞も杉さんです。杉さんの作品にはたくさんの高田の美しい風景が登場します。「赤いろうそくと人魚」の小川未明も高田出身です。舞台となっている「北の海」は直江津の海なんですよ。

自分の住んでいる街が小説の舞台になるなんて贅沢はまず味わえるものではありません。どうぞその贅沢にひたってみてください。見慣れた街が違った風景に見えてきますよ。

残念ながらこの図書館にはほとんど置いてありませんが、近くの上越市立高田図書館にはコーナーが設置されて、著作が揃っています。ぜひどうぞ。

夜間・土曜嘱託員

○海津恒雄 (かいづ・つねお) (昨年度より勤務)

新潟県長岡市の片田舎に生まれました。10才の時終戦。もう年齢はおわかりでしょう。図書館で老人力発揮中です。家族：妻と老猫1匹。子供は皆他郷へ。好きな人・物：良寛さま。ゴルフ etc。元気に仲よく楽しく遊び学びましょう。

○大山樹雄 (おおやま・たてお)

生まれも育ちも上越高田ですが、仕事の関係で新潟県内はほぼ全域を渡り歩きました。名前はこの漢字を書いて「たてお」と読みます。一発ストレートで読んでくれた方は私の長い人生でたった一人でした。高等学校の漢文の先生でした。生涯忘れないでしょう。

○阿部昭 (あべ・あきら)

2年前5か月程病気の為入院を余儀なくされました。その際看護師さんには大変親切に看病して戴き感謝の気持ちで一杯でした。そして今回看護師さんを養成する機関に勤務する事が出来大変嬉しく思っています。まだ不慣れですが一生懸命勤めたいと思いますので宜しくお願いいたします。

非常勤職員

○宮澤綾子 (みやざわ・あやこ) (8:30-15:30勤務)

こちらに来る前は、某スクールで、ヘルパー1級の勉強を半年間してました。実習先の某老人ホームで、テキパキと指示を出す看護師さんの姿に感銘を受けました。それまで、看護師さんというと病院というイメージでしたが、活躍の場が広く、これから大いに期待されている職種だと思います。未来の看護の担い手の皆様の一助となれるよう頑張ります。

今年度の図書館は、上記5名に加え、非常勤職員中島佳代子と嘱託司書飯塚浩子の総計7名でお迎えいたします。

新人が多く、ご迷惑をおかけする点多々あるかと思いますが、お気づきの点などありましたら、どんどんお寄せください。

図書館内のご意見箱または tosyo@niigata-cn.ac.jp へどうぞ。

図書館だより 第13号

2003年6月20日発行

編集：図書委員会

発行：新潟県立看護大学図書館

新潟県立看護短期大学図書館